

登山遠足における児童の転落事故判例における
安全保護義務に関する一考察

美の山公園遠足児童崖転落死事件及び
美作北小三星山遠足児童転落事件

－特別活動における「果たすべき安全保護義務」に関する考察 2－

加 藤 一 佳

「登山遠足における児童の転落死亡事故判例における安全保護義務に関する一考察」において、前回の「弥彦山登山小学生の谷への転落死事件」に続いて、下記事件について考察する。

目 次

- I 美の山公園遠足児童崖転落死事件
- II 美作北小三星山遠足児童転落事件
- III 登山遠足における「安全保護義務」

前回の「弥彦山登山小学生の谷への転落死事件」における「安全保護義務」について、次のように考察した。

小学五年生の転落死は、校長及び遠足の引率教諭らの安全保護義務違反の過失が原因だとする原告の主張に対して、学校側は、通常発生することが予想される危険に対して必要かつ相当な程度の安全保護義務で足りると主張した。

学校が負うべき安全保護義務の範囲・程度について、原告が、教育活動及びこれと密接な関係における、あらゆる危険に及ぶと主張することに対して、学校は、児童の年齢、判断能力に応じて発生が予想される危険の範囲と程度に限定すべきであると反論した。

裁判官は、学校が主張する、五年生児童の精神的肉体的能力に応じた安全保護という範囲、程度を採用し、学校側に義務違反は認められないと判断した。

この事件判例に間近い最高裁判例昭和58年6月7日付け「画鋲付き紙飛行機による眼球負傷事件」判例では、「小学校五学年ともなれば学校生活にも適応し相当の自律能力、判断能力を備えているのであるから、教諭としては、具体的な危険の発生を予測できる特段の事情がない限り、児童の自主的判断に委ねるのは不当な措置ではない。」と判示している。事故発生の責任を教師の過失にのみ求めるのは妥当ではないとするが、だからといって、五年生の児童にのみ責任があることにし然としなないものが残る、と述べた。

本論は、2判例とも学校行事としての登山遠足であり、前回判例と同じ時期の判例であるので、この領域における「安全保護・注意義務」の内容について、引き続いて検討する。

I 美の山公園遠足児童崖転落死事件

本事件は、大宮市立小学校4年2組に在籍する9歳の児童が、学校行事として、標高586.9mの蓑山山頂付近に桜やツツジを植生して作られた美の山公園への遠足に参加し、昼食後斜面を走って崖から転落し頭部を打って約一ヶ月後に死亡した。公園設置管理者である埼玉県と学校設置者である大宮市に過失があったとして、損害賠償が請求された事件である。

美の山公園遠足児童崖転落死事件 浦和地裁平成3年10月25日判決（控訴）

判例は、文部省内教育判例研究会編集「判例・事例による教職員法律問題質疑応答集」（ぎょうせい）による。

埼玉県の責任

埼玉県には、崖下に転落することのないように、転落を防止するための手段を講ずべき、公園設置管理上の注意義務があったとして、設置管理に瑕疵があったとする^{*1}。

本論は、特別活動における「果たすべき安全保護義務」に関し、校長および教諭の安全保護・注意義務の内容について考察することとする。

1 事故の概要

1-1 遠足の実施

昭和62年4月28日、大宮市立東宮下小学校では、茂木教頭、畠中教諭ほか2名の教諭及び1名の用務員が四年一、二組の児童57名を引率して、美の山公園に遠足を実施し、原告児童の綾子もこれに参加した。一行は午後12時10分頃、美の山公園内の展望台に到着し、児童を集めて畠中教諭が斜面を走っては行けない旨の注意事項を与えて、展望台下方の斜面に分散して昼食をとった^{*2}。

1-2 事故の発生

綾子は、午後1時頃昼食をとり終わり、綾子はビニール製レジャーシートを身体の後ろにたなびかせ、スーパーマンのような格好をして斜面下方に向かって駆け降りた。その直後、綾子は飛び降りるような形でジャンプをし、綾子の様子を見ていた小学生らの視野から消えた。綾子の姿が見えなくなる直前に綾子の手からレジャーシートが離れ、それだけが斜面に残された^{*3}。

綾子は、午後1時過ぎ頃、崖の下方で頭部を強打し意識を失っているところを発見されて、病院に運ばれたが、同年5月23日、外傷性くも膜下出血により死亡した^{*4}。

最初に、原告は、小学校における遠足を実施する場合の「一般的な注意義務」を上げ、つづいて、当該小学校が学校行事として美の山公園に遠足を実施するに当たり、具体的な「注意義務」を上げる。そして、この具体的な、いわゆる、「果たすべき安全保護・注意義務」に照らして、原告が綾子の死亡原因であると主張する学校側の「注意義務」違反を列挙する。これらの原告の原因主張に対して、学校側が認否・反論、また、抗弁し、裁判官

が判決の理由を述べる。

以下、本論の目的は校長・教員の果すべき安全保護・注意義務について考察するものであるから、判例にある被告大宮市あるいは小学校校長及び教員を、一括して学校（側）と言い換えることとする。なお、「在るべき」と「果すべき」の混在は、今回は「果すべき安全保護・注意義務」に統一し、多くは注意義務と表記する。

2 学校の「一般的な注意義務」について、原告の主張と学校の認否

2-1 原告の主張

原告は、小学校校長及び教員の一般的な注意義務について、①小学校における遠足は、学習の場を郊外に移し、美しい自然や文化に触れ、学習活動の充実発展を図る等を目的とする学習教育活動の一つである、とした。しかも、②それは学校外における行事であって、時として思わぬ危険が存在すること、③参加者が年少であり、未だ状況の判断や自制する能力が十分に発達していないばかりか、④危険に対処する経験を十分に積んでいない反面、好奇心や冒険心が旺盛で、行動も活発であること、それに野外の遠足に伴う解放感が相乗されるので、⑤校内における教育活動以上に、児童の安全確保上特段の注意と綿密な準備が求められる、とした^{*5}。

2-2 学校の認否

学校側は、これに対して、①小学校における遠足が学校教育活動の一つであることは認めるが、その余は否認した^{*6}。

3 学校の「注意義務」について、原告の主張と学校の認否および抗弁

3-1 原告の主張

原告は、学校には遠足を実施するにあたり、次のような注意義務があった、と主張する。

（一）下見について

事前に目的地の状況、とりわけ危険な個所の存在等についてよく調査し、現地の状況を正確に把握した上で、昼食や自由行動の場所として安全な場所を選ぶ^{*7}。

（二）公園到着後の注意について

児童に対して、危険な崖の個所を具体的に指摘して周知徹底させ、かつ崖の周辺に教職員を配置する^{*8}。

（三）食事中的見回りについて

児童らの行動を把握するために見回り等をする^{*9}。

3-2 学校の認否および抗弁

学校は、これら上記の原告の主張に対して、争うとした^{*10}。さらに、美の山公園到着後、畠中教諭が絶対走ってはいけないと注意を与えたにもかかわらず、綾子はこの注意に違反し、かつ前方の安全を確認することなく斜面を走り下りたので、本件事故は綾子の重大な過失によって発生したものである、と抗弁する^{*11}。

4 学校の「注意義務違反」について、原告の主張と学校の認否・反論

4-1 原告は、3-1「注意義務」に照らして、学校には、次の注意義務違反があったと主張する。

(一) 下見について

①校長は畠中教諭に美の山公園の下見をさせたが、②同教諭は杜撰極まりない下見をしたために、崖の存在に気付かなかった。即ち、③児童らが解放感から羽を伸ばして遊ぶことが予想されるから、その行動範囲を考慮して斜面の下部の状態を調べるべきであったが、④畠中教諭は、斜面の途中まで下りたにとどまり、⑤下方面を調べることを怠ったために、崖を見つけることができなかった^{*12}。

(二) 公園到着後の注意について

⑥遠足の一行が公園に到着した後も、教員らは、斜面付近の安全を確認することをせず、⑦児童に対し、「走ってはいけない。」などと抽象的・一般的な注意事項を伝達しただけで、⑧斜面の下方に崖があるからそちらに近づかないようにとの注意を与えないまま解散した^{*13}。

(三) 食事中の見回りについて

⑨児童たちが斜面に分散して食事をしているにもかかわらず、教員らは、児童たちから離れて展望台付近で食事をし、見回りなどして児童たちの行動を把握することを怠った^{*14}。

(四) 事故は学校の過失が原因

⑩従って、事故は、校長及び引率教諭の過失によって発生させた^{*15}。

4-2 学校側の認否・反論

学校側は、上記の原告の主張に対して、(一) ①④の事実は認めたが、その余は否認し、(四) ⑩は争う。とし、次のように反論する。

(一) ②畠中教諭は、同年4月18日に、下見を実施し、遠足に支障がないか検討したが、特段の支障は認められなかった。

(二) ⑦美の山公園到着後、直ちに児童を集めて、畠中教諭が斜面で絶対走ってはいけない旨の注意を与えた。また、⑧美の山公園のような山地で、危険が存在しているかもしれない箇所を個々に指摘し尽くすことは不可能であって、個々の箇所を指摘するという方法よりも、安全のための行動の方法を指示し注意を与える方法の方がより適切である。

(三) ⑨教員は、児童を掌握するのに都合のよい位置で食事をとっていた^{*16}。

(四) ⑩事故は、⑦のように、絶対走ってはいけない旨の注意に違反して斜面を走り降りたことによって起こったので、綾子の重大な過失によって発生したものである^{*17}。

5 裁判官の判断理由

5-1 学校の「注意義務」及び「注意義務違反」

(一) 下見について

(1) 2-1 ②③④は、経験則上明らかであるので、2-1 ⑤の、遠足の実施に携わる教員には、校内における教育活動以上に、児童の安全確保上特段の注意と綿密

な準備が要求される、とする原告の主張を受け入れ、従って、学校は、児童に昼食や自由行動を指示するに当たっては、それに相応しい安全な場所を選ぶべき注意義務を負っていたとし^{*18}、4-1（一）のように学校側の過失を認めた^{*19}。

（2）学校側が反論として上げた畠中教諭の下見は^{*20}、a. 児童が遊ぶことは容易に予測でき、b. 芝生広場では児童が走るなどの行動範囲を広げることが明らかであり、c. 斜面は畠中教諭自身が危険を感じたような急な斜面であったのであるから、児童が走った勢いで斜面の下方まで行ってしまうことは、容易に予測できる。これらの理由から、昼食をとる場所の下見としては十分ではなかった、と判断する。

（3）それ故、児童の遠足を引率する教員としては、d. 斜面の下方を見分しておけば、e. 崖の存在を容易に現認できたことは明らかである。そして、これらの「注意義務」を果たせば、f. 児童に対し、走ることが危険であることを単に注意するにとどまらず、g. 崖に近づかないように指示するなど、これに対処する方法を講ずることが可能であったとする。

（4）しかるに、畠中教諭は、斜面の下方部分を十分に下見しなかったため、崖の存在に気がつかなかったのであるから、同教諭には、下見について過失があった、と判断する^{*21}。

（二）公園到着後の注意について

（1）遠足の一行が美の山公園に到着した後、畠中教諭が児童に対し、斜面では走っては行けない旨の注意をしたことについては原告と学校側の間には争いがない^{*22}。

（2）原告が主張する4-1（二）⑥、遠足当日にも57名の児童を待機させて安全確認をすることを求めることは妥当でない^{*23}。

（3）学校側が、上記（1）の注意をしたから、畠中教諭らには、過失がない旨の主張は、崖の存在に気がつきにくいという崖の形状に照らせば、転落の可能性も一概に否定できない。

（4）従って、同教諭らの下見義務違反等の過失責任を一切否定する事由にはなり得ない、と判断する^{*24}。

（三）昼食中の監督について

（1）児童らは、斜面内の芝生広場に散らばって昼食をとり、引率教諭は、一通り児童らの間を見回った後、斜面上方のベンチで昼食をとったことを認める^{*25}。

（2）a. 原告が、注意に背いて走る児童がいることを引率教諭は予測して、4-1（三）⑨で原告が主張する、昼食時間中休まず見回りをするをを求めるのは妥当ではない。また、b. 本件斜面の形状に照らせば、引率教諭が高い位置にあるベンチで昼食をとったことは不適切ではない。

（3）従って、昼食中の監督を怠ったとする原告らの主張は採用できない、とする^{*26}。

以上によって、本件事故の発生については、畠中教諭の過失を肯定することができるとして、原告の請求原因を認める^{*27}。

5-2 小学校4年生綾子の過失

裁判官は、本件事故の原因は、畠中教諭が美の山公園の下見を行った際、崖の存在を見

落とした学校の過失である、とするが、同時に、次のような理由から、原告児童の過失を認め、学校の過失を判断するについて相当斟酌されなければならないとする。

- (1) 小学校四年生の綾子が、遠足に行って、解放感や冒険心から、広場のようなところで走り回りたい気持ちになることも理解できないではないが、急な斜面であり、引率の教諭から繰り返し注意を受けていたのであるから、綾子の年齢（九歳）に照らせば、走ることは危険であるという警戒心を持つことが不可能であるとまでは言えない。従って、この注意に背き、また下方の状況を警戒をせずに走ったことについては綾子にも過失があった^{*28}。
- (2) 畠中教諭は、斜面で走ることが危険であると判断したことから、児童に対し二度にわたって走ってはならない旨を注意した。教師の注意義務をいたずらに強調することは、行き過ぎた管理を醸成することになりかねないので、注意義務を考える場合には、この点の配慮を欠くことはできない。
- (3) 遠足のような校外活動にあつては、予想外の危険が存在するのであるから、児童としては、より一層先生の注意を守り、その指示に従わねばならない。このような一般的教育ないし基礎的なしつけは、家庭内における不断の教育において果たされるべき面が大きい。
- (4) 以上の諸点を考慮し、かつ綾子が既に小学校四年生になり、それなりなの分別を持つ年齢にあったことも合わせ考えると、畠中教諭が本件斜面で走ってはならないことを繰り返し注意していたのにもかかわらず、同女がこの注意に背いて走ったことは学校の過失を判断するに当たり、相当大幅に斟酌されなければならない^{*29}。

II 三星山遠足児童転落事件

本事件は、小学校3年の学校行事である登山の遠足で、標高233mの三星山からの下山途中に本道を外れた児童の一人が崖から転落し、上腕骨折、頭蓋骨折等の傷害を負い、左耳の聴力をほぼ全損した事故に関して、学校に過失があったとして、学校の設置者である美作町に損害賠償が請求された事件である。

美作北小三星山遠足児童転落事件 岡山地裁平成4年5月26日判決（控訴）

判例は、文部省内教育判例研究会編集「判例・実例による教職員法律問題質疑応答集」（ぎょうせい）による。

1 事件の概要

1-1 遠足の実施

昭和62年5月8日、美作北小学校三年（一組及び二組）の春季遠足として三星山登山を実施した。原告は、当時三年二組に在籍し、本件遠足に参加した。引率教諭は、一組担任の植月教諭及び二組担任の小林教諭と担任外の石田教諭及び難波教諭の四名が同行した^{*30}。

1-2 事故発生当日の状況

(1) 登山の状況

当日の午前8時30分から、各クラスで担任が遠足の注意を行って、午前9時ころ三年生は運動場に整列し、石田教諭が日程の概略を説明し、かつ、簡単な注意をして登山に向かって出発した。午前10時10分ころ登山口に到着し、10時20分ころ、石田教諭を先頭にはぼ一列で登坂を開始した。午前11時ころ山頂手前のアンテナ広場に到着し、山腹傾斜において昼食をとった^{*31}。

(2) 下山の状況

11時50分ころ、同所において石田教諭が三星城についての説明を数分にわたって行い、話が終了した後、生徒に向かって「これから下ります。」と指示した。このとき、数名の生徒が先生の制止の声を無視して先へ移動を開始し、原告児童は、その後を追いかけた。小林、植月、石田、難波の順ですぐに下山を開始したが、結局、先行生徒に追いつくことができなかった^{*32}。

(3) 事故の発生

原告児童は、下山途中、分かれ道に入り込んで先行する6名を追って進行し、進む道が本道でないことに気付きながら、他の生とともに本道に引き返さないまま進行し、崖から転落した^{*33}。

2 「安全配慮ないし保護義務」について、原告の主張と学校の抗弁

2-1 原告の主張

原告は、遠足は学校行事としての実施であるから、学校には正課授業と同程度の安全配慮ないし保護義務が存在する、として、次の適切な措置をとるべき注意義務を上げる^{*34}。

- (1) 教諭は、①生徒の年齢、能力等を考慮して、②十分な事前調査をし、危険箇所ないし危険状態等を十分把握し、③安全な行程計画を立て、④生徒に危険状態を十分理解させ、⑤生徒が安全に行動できるように引率教諭間の役割分担を決める。
- (2) 引率教諭は、⑥危険箇所の発見に務め、⑦発見したら直ちに適切な措置を講ずる。
- (3) 校長は、⑧最高責任者として、遠足のコースおよび行程が生徒にとって安全なものであることを確認し、生徒の安全を図る^{*35}。

2-2 学校の抗弁と原告の認否

(1) 学校側の抗弁

学校は、これに対して、次のように抗弁する。

①原告は、八歳であり、事理を弁識するに足る知能を有していた。②下山に向けて休憩場所から出発するに際し、教諭の笛を聞き、かつ、「先生が先頭ですよ。」という教諭の言葉を聞きながら、あえて、引率教諭より早く下山しようとした生徒の集団に合流し、教諭を含む後続集団を故意に引き離して下山を進めた。③分れ道に踏み込んだ後に、その道が下山本道でないことを感じながら引き返さず、安易に他の生徒と行動をともにし、本件事故に遭遇した^{*36}。

(2) 原告の認否

原告は、学校の抗弁に対して、原告に指示違反はなく、その年齢、能力からして、

原告に危険予見及び危険回避を求めるのは無理である、とする^{*37}。

3 校長及び教諭の注意義務違反について、原告の主張と学校の認否

3-1 原告の主張

原告は、2「安全配慮ないし保護義務」に照らして、学校には次のような注意義務違反があると主張する。

(1) 不十分な事前調査とコースの安全確認の怠慢

①石田稔教諭は、コースを事前調査をしたが十分な調査をしなかったため、本件コースの危険性及び分れ道の存在に気がつかなかった。②石田教諭、小林教諭、植月教諭、難波教諭は、コースの安全確認を怠り、危険防止策を十分に検討しないまま、コース及び行程の決定を行った。

(2) 引率者の注意義務違反

③事前に生徒にコースの危険性を十分知らしめずに登山を開始し、④下山に際しても適切な指示をせず、⑤危険箇所発見の努力を怠り、⑥教諭に先行して下山を始めた生徒らを放置し、⑦漫然と下山した。

(3) 校長の注意義務違反

校長は、コース及び行程の安全性確認を怠り、生徒の安全を図るべき義務を怠った。

(4) 以上の校長及び教諭の注意義務違反が競合して発生した^{*38}。

3-2 学校の認否

①校長及び教諭には本件事故発生につき過失はない、と認否し、また、②仮に、校長及び教諭の過失が認められたとしても、本件事故とその過失の間には因果関係がない、と主張する^{*39}。

4 裁判官の判断理由

4-1 本件事故発生までの経過

上記の1事件の概要にある部分は省略する。

(1) 登山コースの決定と下見

①石田教諭は、前年の引率教諭から前年の遠足で登攀した北コースは登りにくいと聞き、今回は南コースをとろうと考え、同年5月7日の夕刻に約1時間かけて南コースを下見した。②石田教諭は、南コースに特段の危険箇所等を発見せず、南コースは三年生のコースとして適切なものと判断し、同日夕刻その旨を植月、小林両教諭に報告し、同コースをとることが決定された^{*40}。

(2) 遠足前日、三年生に対して、各担任から遠足についての一般的な注意がなされた。

(3) 事故発生当日の登山の状況

a 当日の午前8時30分から、各クラスで、担任が次の遠足の注意を行った。

①勝手な行動をしない、②危ないところへ行かない、③よく並んで歩く。

b 午前9時ころ三年生は運動場に整列し、石田教諭が日程の概略を説明し、かつ、次の簡単な注意をして、登山に向かって出発した。

①勝手な行動をしない、②よく気をつけて行くこと。

- c 午前10時10分ころ登山口に到着し、10時20分ころから、石田教諭を先頭にほぼ一列で登坂を開始した。植月、小林各教諭は生徒の列の中間に入り、難波教諭が最後尾について登攀した。

午前11時前ころアンテナ広場に到着し、山腹傾斜において昼食をとった^{*41}。

(4) 下山の状況と事故の発生

- d 11時50分頃、同所において石田教諭が三星城について説明を数分にわたって行い、話が終了した後、生徒に向かって、「これから下ります。下りたら難波先生の車のところへ集まります。」と指示した。
- e このとき数名の生徒が移動を開始したので、小林教諭が注意喚起の笛を吹き、難波教諭が「石田先生が先頭ですよ。」と大きな声で言った。
- f 生徒の内先頭にいた2名の生徒は、笛の音を聞いたにもかかわらずそのままアンテナ広場へ向かって移動を続け、後に続いた数名の生徒も笛を聞きながら先頭を追いかけるように移動した。
- g 原告生徒は、その後を1名の友人と追いかけた。
- h 石田教諭は、先行生徒の後を追う形で出発したが、泣いている女兒がいたので同児に付き添ったため、アンテナ広場への到着が遅れた。
- i 石田教諭がアンテナ広場に到着したときには、原告を含む先頭集団の8名が既に下山を始めていた。
- j 小林、植月両教諭は、石田教諭に続いて、すぐに下山を開始した。引率教諭の中では小林教諭が先頭に立ち、植月教諭が2番目、石田教諭が3番目、難波教諭が最後尾という順序で下山を開始した。
- k 8名の先頭集団以外にも数名の生徒が小林教諭の前方に出で下山を始めていた。結局、8名の先頭集団及びその余の先行生徒数名に追いつくことができず、午後12時40分ころ登山口まで下山した^{*42}。

小林教諭も、下山速度をそれほど早めた訳ではなく、かつ、先行する生徒に対して引率教諭の前に出てはいけない旨の指示を出そうともせず、結局、8名の先頭集団及びその余の先行生徒数名に追いつくことができず、指示も出さないまま、午後12時40分ころ登山口まで下山した^{*43}。

4-2 裁判官は、以上の事実を前提にして、学校の過失について次のとおり判断する^{*44}。

(1) コース選定は妥当

本件の南コースは、本道を通る限り小学三年生の遠足のコースとして危険なコースとは認められない。

(2) コース下見に過失はない

石田教諭は、事前の下見において、本件分れ道を発見できなかったが、本件分岐点付近は、落ち着いて通行しておれば本道を見間違ふような箇所ではない。分れ道が存在し、その分れ道は危険性を有するものであったが、これは山あるいは自然に内在する危険の一つであって、教諭に対しこれらの危険のすべてを把握することまで要求することはできない。

石田教諭が下見において分れ道に気づかず、その先に存する危険箇所（本件転落地点等）を把握しなかったからといって、教諭に過失があったとまでいうことはできない。

（３）下山における学校の注意義務違反による過失

- a 本件遠足の当日の下山開始時点での引率教諭の指示は不明確であり、必ずしも適切な指示であったとは認め難い。
- b 石田教諭が「これから下ります。」という指示を出したが、その時点では整列の号令もなく、整列して引率教諭を先頭に下山するという明確な指示もなされていない。
- c 小林教諭が笛を吹き、難波教諭が「石田先生が先頭ですよ。」と声をあげたが、それ以上の指示を出していない。
- d 石田及び小林教諭は、先頭集団に追いつこうとの努力は試みているが、どうしても追いつこうという努力はみられないし、それ以上の指示も出していない。
- e 自然に内在する危険が存在し、それをすべて把握しているわけではないのであるからこそ、危険に遭遇しないように適切な指示を出し、指示を守らせるよう務めるべき義務がある。
- f 教諭が先頭に立ち、一列になって下山するか、下山開始直前に生徒が引率教諭から離れて急いで下山してはいけない旨の指示を徹底しておれば、本件事故の発生を容易に阻止しえた。
- g 下山に際して、引率教諭の明確かつ適切な指示が出されておるべきであった。
- h 生徒が引率教諭に先行して下山を始めた時点では、それを阻止すべき措置をとるべきであった^{*45}。

４－３ 小学３年生原告生徒の過失

裁判官は、本件事故の原因は、下山開始時点において引率教諭による下山についての指示の不明確さと不徹底にあり、また、指示を守らせる努力義務に欠けていたとして、学校の過失である、とするが、同時に次のような理由から、原告児童の過失を認め、学校の過失を判断するについて斟酌すべきものとする。

- （１）原告生徒は、４－１（２）、（３）のように遠足の前日及び当日に担任から遠足上の一般的な注意を受けており、遠足では勝手な行動をとってはならないことを熟知していたと認められる。
- （２）石田教諭の下山指示の直後、先行グループを追って移動するとき小林教諭の笛を聞いて、勝手な下山が禁止されていることに気がつくべきであるし、少なくとも引率教諭から何らかの注意があることを察知して、現在位置で引率教諭を待つべきであった。
- （３）しかるに、原告は、先頭集団を追って下山を早め、その結果先頭集団とともに分かれ道に入り込んだ。また、原告は、分かれ道を進行するうち、本道でないこと及び危険な個所に出してしまったことに気がつきながら、本道に引き返さずに、その結果転落した。
- （４）原告のこのような行為は、その年齢を考慮しても、なお過失相殺の対象として斟酌すべきものである^{*46}。

Ⅲ 登山遠足における「安全保護義務」

1 遠足における「注意義務」

美の山公園遠足児童崖転落事件（以下、美の山公園遠足）で、遠足は、「学習の場を郊外に移し、美しい自然や文化に触れ、学習活動の充実発展を図る等を目的とする学習教育活動の一つである。」とし、また、美作北小三星山遠足児童転落事件（以下、三星山遠足）では、「学校行事として実施されたものである」と原告は主張する。これらの学校教育活動における遠足の位置づけは、次のように、学習指導要領及びその指導書に基づくものである。

美の山公園遠足は昭和62年4月28日実施であり、三星山遠足は、昭和62年5月8日の実施であるので、昭和52年7月改訂の小学校学習指導要領の特別活動を見ると、学校行事の遠足・旅行的行事（以下、遠足）は、「郊外において見聞を広め、集団生活のきまり、公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができるような活動を行うこと。」をその内容とする。つづけて、昭和53年5月の小学校指導書特別活動編では、遠足は、「学校における学習活動を充実発展させるとともに、校外における集団行動を通して、心身を鍛練し、集団行動の楽しさを味わわせる。」^{*47}ことがそのねらいとする。

また、因みに、美の山公園遠足事件は平成3年10月25日の判決であり、三星山遠足事件は平成4年5月26日の判決であるから、平成元年3月改訂の学習指導要領に基づいた小学校指導書特別活動編を見るならば、遠足（・集団宿泊的行事）の一般的ねらいは、「校外における集団活動を通して、教師と児童、児童相互の触れ合いや自然との触れ合いを深め、基本的な生活習慣や公衆道徳などについての体験を積むことによって、望ましい成長を図る。」^{*48}こととしている。

これらの特別活動における学校行事としての遠足の計画と実施に関して、昭和43年10月2日付文部省通達「小学校、中学校、高等学校等の遠足・修学旅行について」^{*49}において、遠足（以下、修学旅行は省略する）の計画と実施にあたっては、「学習指導要領、学校行事等指導書に示すところにより、その内容をじゅうぶんに吟味して、教育的効果を高めるようにすること。」とし、事故の絶無を期して留意事項をあげる。

遠足における事故防止の留意事項として、「平常から道徳教育や生徒指導の充実に努め、特に事前の安全指導の徹底を図ること」、「事前にじゅうぶんに調査し、検討しておくこと。特に、新しい経路を選ぶ場合には、細心の注意を払い、より入念に検討すること」を上げている。したがって、本件の遠足の計画と実施にあたっては、昭和52年7月改訂の学習指導要領及びそれに基づく指導書によって行われることとなる。

前掲の文部省通達において、遠足の計画と実施に関し、昭和28年7月10日付の通達から、事故防止についてくり返し通達してきたが、なお一層の安全指導の徹底を要請している。また、学校指導書においても、くり返し求められてきた事故防止の留意点は、学校が「果たすべき安全保護義務」であり、教育活動において教諭に求められる「果たすべき注意義務」である。

2 学校の「注意義務違反」

学校行事の遠足である、校外における教育活動として、事故防止の一般的な注意義務に照らせば、美の山公園遠足では、計画作成における事前調査の下見において、予想される児童の行動を考慮して斜面の下部の状態を調べるべきであったが、そのことを怠ったため崖の存在に気付かなかったことから、崖転落防止の対策を検討することのないまま実施され、原告児童が崖から転落したというものであった。しかも、下見した教諭は、斜面なので児童が走ると危険であると予測していたのである。いわゆる重大な結果が生ずる危険が予見されたのであるから、当然、事故防止策が検討されなければならない。

三星山遠足では、第一に、遠足計画作成における遠足コースの事前調査において、分かれ道の重大性に気付かないままコースを決定した。特に、これまで実施してきたコースとは違う新しいコースを選ぶのであるから入念に調査すべきであった。第二に、下山開始時点での引率教諭の指示が適切でなく、教諭より先きに下山しようとする生徒に対して引率教諭は厳しく阻止すべきであったが、その措置をとらなかった。第三に、引率教諭には制止を無視して先行した集団に追いつこうとした努力は見られなかった。

前掲の通達では、「事前にじゅうぶん調査し、検討しておくこと。特に新しい経路を選ぶ場合には、細心の注意を払い、より入念に検討すること。」とあり、昭和53年5月の指導書では、前掲の通達をふまえて、計画作成においても、実施上においても「事故防止のための万全な配慮をし、また不測の事態に対しても、適切な処置をとることができるよう配慮しなければならない。」ことを留意点とする^{*50}。

三星山遠足事件では、前掲のⅡ4-2(3)にみるように、「引率教諭は、山あるいは自然の中にそれに内在する危険をすべて把握しているわけではないからこそ、引率教諭は、生徒の安全を図るために、不測の危険に遭遇しないように適切な指示を出し、指示を守らせるように努めるべき義務がある。」と述べ、具体的には、「教諭が先頭に立ち、一列になってゆとりをもって下山するか、下山直前に、生徒が引率教諭から離れて急いで下山してはいけない旨の指示を徹底しておれば、事故の発生を容易に阻止しえた。また、引率教諭に先行して下山を始めた時点では、それを阻止すべき措置をとるべきであった。」^{*45}と判示する。

事故防止について繰り返し要請され、計画及び実施上の留意点として、入念な下見が求められ、また、指示に従わない生徒の行動には断固たる処置が求められているにもかかわらず、杜撰な下見と不適切な処置によって、重大な事故の原因につながることが判示された。

伊藤進氏は、学校行事の際の教員の安全義務は正課授業中とほぼ同様としながらも、「一時的な要素の強い教育活動であることから、どのような危険が伴うかは予測しがたい面がある」として、「正課授業や課外活動中よりも安全義務が過重される傾向にある」とみている^{*51}。

3 児童の分別能力

昭和52年7月改訂の小学校学習指導要領では、特別活動の指導計画は、児童の発達段階を十分考慮して作成するものとし、それに基づく小学校指導書特別活動編の学校行事の指

導計画では、学校行事は、児童の発達の特性や学年段階に即応するもの、としている^{*52}。

三星山遠足における注意義務は、前掲のⅡ 2-1にみるように、「正課授業と同程度の生徒に対する安全配慮ないし保護義務」とし、その内容は、「生徒の年齢、能力などを考慮して、十分な事前調査をし、危険箇所ないし危険状態を十分把握し、安全な行程計画を立て、生徒に危険状態や危険箇所を十分に理解させ、生徒が安全に行動できるように適切な措置をとること。」であり、また、「当日は、危険箇所の発見に務め、これを発見したら直ちに適切な措置を講ずることである。」^{*55}とする。

美の山公園遠足における注意義務は、前掲のⅠ 2-1にみるように、「学校外における行事には、思わぬ危険が存在し、小学生は未だ判断力、自制心が十分でない以上、危険に対処する経験も乏しい反面、好奇心や冒険心が旺盛で、行動も活発であること、これに野外の遠足に伴う解放感が相乗される。」ので、「校内における教育活動以上に、児童の安全確保上特段の注意と綿密な準備が求められる」^{*56}とする。

この特段の注意義務の内容は、前掲のⅠ 3-1にみるように、「現地を下見して、危険な箇所の存在について正確に把握し、安全な場所を選ぶこと」であり、「児童に危険な箇所を周知徹底させ、崖の周辺に教職員を配置」し、「子供らの行動を把握するために見回りをする」ことであるとする。

美の山公園遠足では、教諭が、斜面で走ってはならないことを二度繰り返して注意していたにもかかわらず、原告児童がこの注意に背いて走ったことが事故の直接原因であるが、斜面を走ることは危険であること、注意に背いて走ってはいけないこと、は小学校四年九歳の児童が判断することは不可能ではなく、それなりの分別をもつ年齢である、とする学校側の抗弁を受け入れ、さらに、このような一般的教育ないし基礎的なしつけは、家庭内における不断の教育において果たされるべき面が大きい、と判示する。

さらに、教師の注意義務をいわずらに強調することは、行き過ぎた管理を醸成することになりかねないので、注意義務を考える場合にはこの点の配慮を欠くことはできない、と学校教育への理解を示す。

三星山遠足では、原告生徒は、遠足の前日及び当日に遠足上の一般的な注意を受けていたので、勝手な行動をとってはならないことを熟知していた。下山開始直前に、原告は、引率教諭の制止を無視して先行した数人の集団を追って移動するとき引率教諭の笛を聞いて、勝手な下山が禁止されていることに気がつくべきであるが、先頭集団を追って下山を早め、しかも、分かれ道に入り込んで本道でないことに気付किながら、引き返さずにそのまま転落した。原告は、小学校三年生八歳であるが、事理を弁識するに足る知能を有していた、とする学校の抗弁を受け入れ、学校の過失を判断するにあたり斟酌すべきものであると判示する。

伊藤進氏ならびに織田博子氏は、引率教諭の安全義務についての一般的傾向として、「生徒の学年、年齢が低いほど引率教諭は、個別的、具体的な指示・注意を与え、監視義務も強化されるということが出来る。」また、「校外での行事は、生徒が開放的な気分になる傾向にあることも予測されることであるから、引率教諭に課される注意義務は、通常の授業の場合と比べて高度化される傾向にある」^{*53}と、いえるという。

4 学校の教育活動と「安全保護義務」

学校行事における留意すべき安全義務について、伊藤進氏は、次の8点を上げ、そのうち、生徒に対する実施上の指導監督、現地での危険性についての注意、実施にあたっての監視の3点にかかわる安全義務違反は、担当教師の個人過失が問題になるだろうが、その他の、安全な指導・事故防止のための計画作成、生徒に対する事前指導、安全性確認のための実施調査としての事前調査、万一の危険に備えての救護体制、人員点検・健康観察などの事後確認などは、学校自体の組織過失の問題にするのが妥当と思われる、とし、つづけて、その理由として「学校行事での事故は、その学校行事そのものに内在していた危険が原因である場合が多いわけで、これを担当教師の個人過失にしてしまうことは好ましくないからである。」とする。^{*54}

また、市川須美子氏は、横浜市立中学校プール飛び込み事故及び湯河原小学校サッカー事故の最高裁判例をふまえ、組織的に行われる今日の学校教育においては、学校の安全義務は、学校管理者の条件整備的義務と教師の教育専門的安全義務から成り立つとする^{*55}。

前掲の昭和53年5月の指導書では、遠足の実施上の留意点として、事故防止のための万全な配慮をしなければならない^{*56}、としており、前掲の通達においては、遠足における事故の絶無を期して、事前の十分な調査、検討とともに、平常から道德教育や生徒指導の充実に努め、特に事前の安全指導の徹底を図る、ことに留意することとより具体的に記している。

美の山公園遠足事件で、学校行事として、学習の場を郊外に移して行う遠足は、校内における教育活動以上に児童の安全確保上特段の注意と綿密な準備が求められる、とする原告の主張に対して、学校側は、山地で危険が存在しているかもしれない箇所を個々に指摘し尽くすことは不可能であるので、個々の箇所を指摘するという方法よりも、安全のための行動の方法を指示し注意を与える方法の方がより適切である、と反論する。

三星山遠足事件で、山あるいは自然の中に内在する危険が存在し、引率教諭はそれをすべて把握しているわけではないからこそ、引率教諭としては、生徒の安全を図るために、そのような危険に遭遇しないように適切な指示を出し、指示を守らせるように努めるべき義務があるといえる、と判示する。

事故の防止に関する教育的側面の制度について、吉田瑩一郎氏は、子供自身に安全に対する知識やと技能を身につけさせていくことで、各教科とか、道德、特別活動といった教育活動の中で、授業として安全教育が行われる制度であると述べている^{*57}。

本論で取り扱った二つの判例における、「果すべき注意義務」を比較すれば、美の山公園遠足事件における判示よりも、三星山遠足事件では、教諭の具体的な個々の注意義務を求め、厳しい管理的な注意義務を判示している。

このような管理的注意義務の強化傾向にあつて、美の山公園事件判例では、斜面を走つてはいけないと繰り返し注意することについて、教師の注意義務をいたずらに強調することは、行き過ぎた管理を醸成することになりかねないので、注意義務を考える場合には、この点の配慮を欠くことはできない、と児童の自主性を重んずる判断を示している。

このことは、同判例において、原告が、児童たちが斜面に分散して食事をしているにも

かわらず、教員らは、見回りなどして児童たちの行動を把握することを怠った、とする主張に対し、昼食時間中休まず見回りをするをを求めるのは妥当ではない、と判示していることにも伺える。

教員が負う安全注意義務は一定の範囲内とされるが、「注意義務の内容・程度について、いかなる場合でも、絶対に事故が発生しないような内容・程度の指導監督をせよと要求することは不当であり、事実上一切の教育指導を不可能にしてしまう」として、文部省内教育判例研究会は、「一般的に、教員に要求される注意義務の内容・程度の厳格性は、教育活動の危険発生率が高いほど厳格となり、対象となる児童・生徒の危険判断能力等が低ければ低いほど厳格となる」として、これを次の式であらわしている。

$$\left[\begin{array}{l} \text{教員に要求される注意義務} \\ \text{の内容・程度の厳格性} \end{array} \right] = K \times \frac{\text{教育活動の事故発生率の高さ}}{\text{児童・生徒の危険判断能力等の高さ}}$$

(Kは定数であり、時代の流れによって異なるものとする)*58

学校事故予防の今日的課題として、藤井陽光氏は、次のように述べている。

「学校事故の特色の一つは、現代的利便さの増大による生活環境の変化が最近の子どもの心身の脆弱化を招き、学校事故の増加に結びついていること。もう一つは、今日の学校教育が余りにいろいろなことがらを取り込んで、さまざまな事柄をきめ細かく教えなければならなくなっていることである。このような状況下では、教員が良心的に指導対応しようとするれば、一定の確率で事故が発生してしまうであろう。学校事故の増加が、教員の意欲を萎縮させ、教育内容、方法の豊かさを抑圧する結果となるならば、誠に残念なことである」*59。

註

- *1 <事実>第二-4 (四)
- *2 <事実>第二-2 (一)
- *3 <理由>二2 (二)
- *4 <事実>第二-2 (二)
- *5 <事実>第二-5 (一)
- *6 <事実>第二 三4 (一)
- *7 <事実>第二5 (二) (1)
- *8 <事実>第二5 (二) (2)
- *9 <事実>第二5 (二) (3)
- *10 <事実>第二 三4 (二)
- *11 <事実>第二 四1
- *12 <事実>第二-5 (三) (1)
- *13 <事実>第二-5 (三) (2)
- *14 <事実>第二-5 (三) (3)
- *15 <事実>第二-5 (四)
- *16 <事実>第二 三4 (三)
- *17 <事実>第二 四1
- *18 <理由>五2 (一) (1)

- *19 <理由>五2 (二)
- *20 <理由>五2 (一) (2)
- *21 <理由>五2 (一) (3)
- *22 <理由>五2 (二) (1)
- *23 <理由>五2 (二) (2)
- *24 <理由>五2 (二) (3)
- *25 <理由>五2 (三) (1)
- *26 <理由>五2 (三) (2)
- *27 <理由>五3
- *28 <理由>七1 (二)
- *29 <理由>七1 (三) (1)
- *30 <理由>－1 (2)
- *31 <理由>－1 (3)
- *32 <理由>－1 (4)
- *33 <理由>－1 (5)
- *34 <事実>第二－3 (2)
- *35 <事実>第二－3 (3)
- *36 <事実>第二 三
- *37 <事実>第二 四
- *38 <事実>第二－3 (3)
- *39 <事実>第二 二3
- *40 <理由>－1 (2)
- *41 <理由>－1 (3)
- *42 <理由>－1 (4)
- *43 <理由>－1 (4)
- *44 <理由>－ 2
- *45 <理由>－2 (3)
- *46 <理由>二1
- *47 小学校指導書 特別活動編 昭和53年5月 文部省 p101 東洋館出版社
- *48 小学校指導書特別編 平成元年6月改訂 文部省 p59 東山書房
- *49 昭和43年10月2日文初中第450号
- *50 前掲 指導書 昭和53年5月 p102
- *51 学校事故の法律問題 p173 伊藤進著 三省堂
- *52 前掲 指導書 昭和53年5月 p89
- *53 判例時報1282号 p188 学校事故賠償責任の判例法理(10) 学校行事に伴う事故と過失(2)
伊藤進・織田博子著
- *54 前掲 学校事故の法律問題 伊藤進著 p173～p174
- *55 ジュリスト886号 p21 学校事故における学校・教師の責任 市川須美子著
- *56 前掲 指導書 昭和53年5月 p102
- *57 ジュリスト886号 p4 学校事故を考える 吉田瑩一郎談
- *58 判例実例による教職員法律問題質疑応答集3 P.5771～5772 文部省内教育判例研究会
編集 ぎょうせい
- *59 ジュリスト886号 p31～32 学校事故防止対策の原理と課題 藤井陽光著